

1年2組

 あさがおさんとの暮らし  
 ～ずっといっしょだよ わたしたちのあさがおさん～


## あったかくしてあげたいな 朝顔ハウス

「冬にも朝顔さんに会いたいな」と採れた種から成長を願い、お世話をしていた子どもたち。子どもたちは、「ビニールハウスを作って、あったかい所に入れてあげよう」と必要な道具を準備して作り始めました。あさがおトンネルを作る時同様に、みんなで協力して作る姿がありました。ビニールハウスを作っていくうちに、子どもたちの中にいろんな気づきが生まれました。「なんかあったかくなってきた気があんまりしない」と首をかしげるAさん。「今、この中何度なの?」「温度計が必要だと思うよ」と子どもたちがつぶやき動き出しました。すぐに、理科の先生の



ところに行き、温度計を借りてきたBさん。それでも中の温度は、教室の温度と変わりません。「エアコンの空気あったかいから、ハウスの中に送れるようにしたいな」と願いが生まれてきました。安全性を考え、ダクトのようなものを用意すると、子どもたちで考え設置をしていきました。ダクトをビニールハウスに挿入し、エアコンのスイッチを入れてみました。すると、ダクトからエアコンの空気が流れ込み、徐々に温度が上がっていきました。Cさんたちは、「25度から30度は朝顔さんにとってうれしい温度だよ。あさがおさん大きくなってほしいな」と、毎日朝顔とハウスの状態をチェックしました。チェック表を見ると朝顔さんは元気を取り戻し、少しずつですが、大きくなっていきました。春と比べて、成長過程が遅い朝顔を見つめながら、お日様の光が植物の成長にとって大切なものであることも改めて再認識し、経験から学ぶ子どもたちの姿が印象的でした。



大きく成長しなかったものの、なんと、蕾が出てきました。「これは、ピンクの花がさくよ!楽しみだなあ～、だって、根っこの色でわかるもん」と、図鑑で知ったことを伝えるDさん。また、自分の朝顔から種が落ち、プランターから新たに生まれてきた朝顔さんを見て、Eさんは、「わたしはこの朝顔さんのおばあちゃんだよ」とハウスの中で大切にお世話してきました。そして、蕾から花が咲き始めたのです。Eさんに今の気持ちを聞きました。「外にそのままにしておいたら多分死んじゃった。ハウスのおかげで、朝顔さん咲いてくれるのが嬉しい」と笑顔で語ってくれました。冬休みに持ち帰ったFさんやGさんが、休み明け咲いたお花の写真をもってきてくれました。冬にも朝顔さんに出会い、朝顔さんと向き合い、大切に育てようとする子どもたちがいました。

## あさがおさん いままでありがとう

12月上旬、朝顔トンネルの朝顔さんのお別れについて、みんなで話し合いました。Aさんが「朝顔さんを思ってお別れ会をしたい」と話しました。すると、「お手紙を書いてあげたいな」「お花もお供えしたいな」と次々に話しました。Hさんは、「朝顔さんの歌を歌って、ありがとうを伝えたいよ」と語りました。みんなも賛同し、お別れ会では、「朝顔さんに手紙を書くこと」「朝顔さんの歌を歌うこと」が決定していきました。続けて、Iさんは「お別れ会もそうだけど、燃やしたい。煙で天国にいつてほしいから」と言いました。Jさんは、「それなら全部種を取りきらないといけないね」とみんなに提案しました。まだまだ、語り合いが止まりません。「手紙を書いて天国で読んでほしいな」「お別れ会の時、燃えた火で焼き芋をして、朝顔さんを思いながら食べたいな」と朝顔さんを思った声が多く挙がりました。朝顔さんとのお別れ会



焼き芋をして、朝顔さんを思いながら食べたいな」と朝顔さんを思った声が多く挙がりました。朝顔さんとのお別れ会

に向けて、子どもたちは、雪の日も雨が降った日も、種取りに積極的に取り組んでいました。

種を取り終え、いよいよお別れ会に向けて、朝顔トンネルの支柱を外す時がきました。網は燃やすことができないため、手作業で取ることに決めました。「ハサミは朝顔さんが可哀想だから」というKさんの言葉から、ハサミを使わないで取ろうとしましたが、なかなか取れません。Fさんは、「朝顔さんぐるぐる絡んでいるよ。茎もすごい太いよ」と朝顔さんの力強さに驚きながら丁寧に取り外していました。だんだん、トンネルの支柱を外していくとMさんは、「朝顔さんトンネルがなくなるのは寂しいな、種を植えた時のこと思い出しちゃうな」と悲しそうに私に語りました。お別れ会当日、仲間と協力をして、朝顔さんを運び、書いた手紙を朝顔さんに渡しました。1番朝顔さんが輝いていた写真を持って、みんなで、朝顔さんの歌を歌いました。朝顔さんが天国へ旅立つ火の中に手紙を入れると、封筒が開き中の手紙が出てきました。その光景に、「僕の手紙読んで、読んでよ、すごい嬉しい」と歓声があがりました。Nさん、涙を堪える様子がありました。話を聞くと、「だってさ、朝顔さんがなくなっちゃうからお別れが寂しい。ありがとうって言いたい」と語りました。朝顔さんを見つめ、時には朝顔さんの気持ちを考えながら行動してきた子どもたち。私は、大人になるにつれ、忘れていた純粋な子ども心と子どもならではの見方、子どもに見えている世界の尊さ、素晴らしさを感じました。また、朝顔さんへの優しさが、次第に周りの仲間への優しさや思いやりにつながっているように思いました。

この朝顔トンネルは、今回、長野市が主催する「花と緑の大賞2025」で、アイデア賞に選ばれました。学校外の方から、私たちの取り組みを評価していただいたことも、子どもたちにとって朝顔さんへの思いを深める出来事になりました。子どもたちにとって、朝顔さんを単なる植物ではなく、大切な命であり、かけがえのない存在でした。朝顔さんとの暮らしから、「対象を見つめて感じ、願いをもって、働きかけ続けていく子ども」の姿を見たように思います。

あさがおさん いままで ありがとう



## 朝顔さんの命をつないでほしい

「朝顔さんの命を繋いでほしいから全校のみんなに配りたいな」と始まった朝顔の種プロジェクト。生活科と算数「大きい数」の学習を使って、まずは朝顔さんの種を数えていきました。子どもたちは、最初1個ずつ数えていきましたが、しばらくするとOさんは、「算数でやった10ずつまとめて数えるといいよ」と友達にアドバイスを送りました。「2、4、6、8、10」と10を作り、10のまとまりを仲間と作っていきました。Pさんは、「10のまとまりをつくれれば、10、20、30って数えるのも楽だね」と笑顔で語っていました。日に日に、種を数える行為を通して、子どもたちは自分の数理を確かなものにしていきます。子どもたちの様子を観察していくと、10のまとまりを10個縦に作っていきます。「10のまとまりが10個で100、100が4個で400、今400だよ。先生!」とQさんが私に笑顔で語りました。100よりも大きい数は学習していませんが、体験活動から数量の構造を捉えようとする姿がありました。Rさんの班は、最終的に縦に10のまとまりを縦に10個、横に10個作り、1000個の種を数えました。Sさんは、「ここ(縦一列)が100だからそれが10個で1000、数えやすい」と語りました。算数の既習事項を活用し、生活に活かす姿に驚かされました。この考え方を、全体で共有するとたちまち数える速さが一気に速くなっていきました。新たな数との出会いからくる学びは、生きた知識として、子どもの力になっていると感じます。全部で、58,388個の種が採れました。子どもたちは達成感でいっぱいです。ここから、種を配ろうプロジェクトに向けて、動き出す子どもたち。まだまだ朝顔さんとの暮らしは終わりません。

たねをひとつひとつたいせつにかぞえたい



たねをくばろう プロジェクト

